

リニア工事 川が細る？

表題は日経新聞 3 月 21 日朝刊の社会面だ。リニアの巨大工事については多くの問題が指摘されてきたが、この記事にも注目したい。

JR 東海が進めるリニア中央新幹線のトンネル工事に絡み、静岡県中部の大井川の流量減少が懸念されている。南アルプスの地下を走る水脈を断ち切り、川に集まる水の流れを変えてしまうのではないかと。地下の状態を事前に把握するのは難しく、地元では不安がくすぶっている。

昨年 12 月に始まった「南アルプストンネル」の工事は、山梨、静岡、長野にまたがる南アルプスの地下を長さ約 25km にわたって掘り進む。工事の最大の障害とされるのが、地表から染み込んだ雨水や雪解け水を集めて走る地下の水脈。

和田秀樹・静岡大名誉教授（地球科学）は「南アルプスの地質構造は複雑で、水がどこでどれだけ出るのは掘らないと分からない」と指摘する。南アルプスの間ノ岳を源流として駿河湾に注ぐ大井川について、JR 東海は、地下の水がトンネル内に染み出すなどして流量が最大で毎秒 2 トン（17%）減ると予測。ただ「あくまでも試算にすぎず確実な数字ではない」（和田名誉教授）という。

大井川の水系には 14 の大型水力発電所があるほか、流域の 7 市約 60 万人の飲料水の源となっており、下流地帯には酒造場や飲料工場、制約工場など豊かな水が欠かせない施設が集まる。大井川への影響を低減するため、JR 東海は河川やトンネル、地盤の専門家を集めた検討委員会を設置。流れ出た地下水を導水路やポンプを使って大井川に戻す対策を示し、「中下流域への影響は避けられる」と説明している。だが「温度や成分が異なる地下水を川に戻すと水質が変わらないか」「上流は水が減って動植物に影響が出る」などと不安の声は消えていない。

水量が豊富で、江戸時代には東海道の難所として「越すに越されぬ」とうたわれた大井川だが、1960 年ごろからダムや発電所の取水で流量が減少。自治体が電力会社と交渉を重ねて流量を確保してきた経緯がある。静岡県生活環境課の市川加代子課長は「大井川は流域の日常生活や生産活動の基盤」と強調。「影響を最小限にとどめるため、工事はデータを集めながら慎重に進め、速やかに情報を共有してほしい」と求めている。

(2016 年 3 月 24 日)

